

○今 尚之

(小樽商科大学)

【目的】 情報化の進展が進みつつある現在、生活における情報活用のリテラシー教育が学校教育、生涯学習の場で求められている。本研究では教育の対象者が置かれている情報環境や情報化に対する認識構造を明らかにし、今後の生活情報リテラシー教育の在り方を考察する基礎資料を得ることを目的としたものである。

【方法】 高等学校に通学する生徒を対象に、情報環境と情報化社会に対する認識について、プリコード式により意識調査を行った。情報環境については保有する情報機器や生活情報として必要としている情報とその情報源・満足度を、また情報化による社会変化への意識と必要となるリテラシーに対する認識について回答を求めた。

【結果】 パソコン、ワープロを保有する家庭が60%を超え、生徒自身が電話などを保有する回答も20%を超えるなど家庭への情報処理機器の浸透、コミュニケーションツールの個人所有化が低年齢層にまで進んでいることが示された。その一方で、パソコンネットワークの利用は6%以下と極めて低く家庭でのパソコンがスタンドアローン環境において使われていることも分かった。また、情報化社会に対する意識を数量化Ⅲ類によって構造化した結果、被験者らは情報化社会の進展を人と人との交流が活発となる、ゆとりや安心が出る、機械的な社会になるという三つの意識で捉えていることが分かった。さらに、情報化社会で必要とされるリテラシーについて主成分分析を行った結果、情報そのものの理解と機器操作の習得について高い関心が持たれているが、意思決定など得られた情報の活用には余り関心が持たれていないことが明かとなった。